

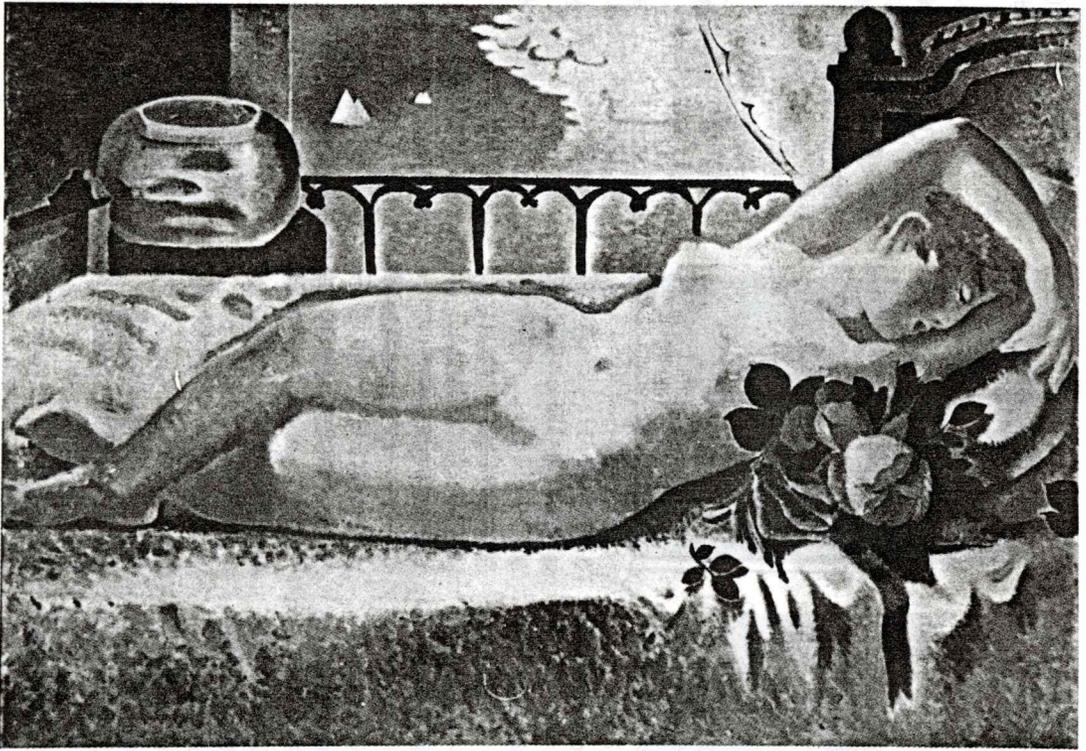
# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 6 NO. 4

昭和54年12月13日 発行  
編集・発行人 市原 正夫

〒260  
千葉市中央港1丁目10番1号  
☎0472-42-8311(代表)



板倉 鼎「裸婦」

## 観潮台

いま一冊の本が机上にある。私の史観にびつたりの『写真集 東山魁夷の世界』(集英社刊)である。巨大な存在である東山芸術については、すでに識者の評価が重く、ここでも云々するまでもないが、この本から私は東山芸術の原風景を実感した。

ここでいう原風景とは、日本画家東山魁夷の人間と生活の形成空間であり、さらに、作品の形成空間を総称している。私は作品理解には、こうした生い立ちや生活・制作の基盤まで含む原風景を、作品に接近する現実に加えることが重要だと思ふ。

このたびの『写真集 東山魁夷の世界』は、企画者の努力でこうした視点の可能性を裏証した。雪の奥日光での厳しいスケッチの旅から始まる本だが、文字どおりの原風景が採録されており、さらに、三歳から七歳までの写真年譜が、東山芸術の軌跡を伝える感動のドキュメントとして視覚できた。とにかく、東山芸術の秘められた原風景がいっぱいであり、楽しく味わいながら頁をめくった。

(高橋在久)

新春一月五日より開催

# 美に生きた永遠の青春 板倉鼎展



「自画像」

「天折」という言葉には、ロマンの香りを漂わせた、秘そやかな語感がある。そこには若いエネルギーを結実させた華やかな花火のような、或は思いを投げ切れなかつた悲しみというような美しさが渦巻いている。若さ故に持つひたむきな情熱が、なにか格別の美しさ、味わいとなって現われ、それが人々の心を持って離れない魅力となっている。板倉鼎もその一人である。といっても、その名を知っている人はあまり多くはないであろう。次代を担う画家と

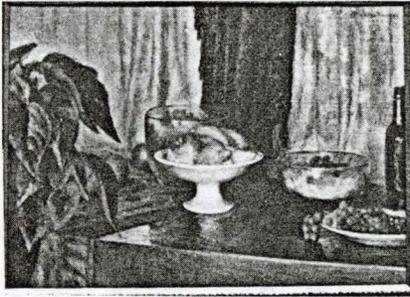
してその将来を囑望されながら、自己の場を確立しえないままにパリに客死した画家である。作品の方は御来館いただき実際にみて味わっていただければと思ひ、ここではこの作家の概略を紹介することにしました。

## 生いたち

板倉家一族という何やら古めかしいが、代々医者の家柄で、鼎はその八代目に当る。父の代に埼玉より移住し、松戸で医院を開業している。鼎は、一九〇一年（明治三十四年）三月二十六日、父打太郎母かつの長男として生まれた。一九一三（明治四〇年）、松戸尋常高等小学校（現松戸市立中部小学校）を卒業。この頃より画家になるつもりであったという。

一九一八年（大正二年）県立千葉中学校（現県立千葉高等学校）に入学。当時は交通

の便が悪く、入学と同時に寮生活を送っている。この間、同じ常盤線沿線の仲間たちと「ときわ」という雑誌を作り、鼎はその表紙のデザイン・カットなどを受け持ち飾っている。中学校時代は昨年の展覧会でご紹介した堀江正章に指導を受けている。今、この時の勉強振り、影響がどの程度のものであったかを計るすべ



「静物」

はないが、画家への意志はよいよ明確なものとなつてきている。

堀江正章は千葉中学校赴任以前に大幸館で、岡田二郎助・中沢弘光らの俊才を育てている。後年、岡田が一躍して鮮麗な色彩を覚えたのは堀江によるものだともいわれている。このような関係もあって、中学卒業後、東京美術学校で岡田門下に加わつたも自然の成行きといえよう。

当時、洋画家になるとい

## カナダからの礼状

去る七月三十一日～八月十二日にかけて「カナダ風景画展」を開催したが、終了後、カナダ大使より次のような礼状をいただいた。

拜啓 市原様

カナダ大使館を代表しまして、今回の「カナダ風景画展」を開催するに当つてあなたの美術館のご厚情に對してあつく御礼申し上げます。特に、日加国交五十年周年記念に際し、このたびの展覧会により、日本とカ



「庭にて」

ナダの文化交流の絆がより強まったことを確信してやみません。現代カナダ芸術の粋を最もふさわしい美術館で開催できたことは思いもかけぬ喜びでした。この機会を縁に、千葉県立美術館でカナダの展覧会を今後とも開催できたらと思つています。

日本とカナダの文化の伝播に最大の努力を惜しまなかつたあなたに、かさねてあつく御礼申し上げます。ご幸福を心からお祈り申し上げます。

ブルース・ランキン大使

敬具  
(原文は英文)

ことは「貧乏画描き」という言葉もあつた様に、その生活は容易なものではなかった。父打太郎はもちろん医者にするつもりで反対したが、鼎の決意は固く、ついに父の黙認を得て画家への一步をふみだすこととなった。

一九一八年（大正八年）、一年遅れたが、無事東京美術学校（現東京芸術大学）西洋画科に入る。同級に岡鹿之助、野口謙三らがいた。在学中より帝展、春陽会展、日日新聞社展に入選するなど師岡田の画風を受け継いだ写実的で温雅な画にその力量を発揮している。

この頃、日本の洋画壇には一九二三年（大正十二年）に起つた関東大震災の前後からフォービズム、立体派、未来派、表現派、構成派、ダダリズム、超現実主義などヨーロッパ現代絵画の様々な傾向が矢つぎ早々に紹介されていた。それに呼応して、前衛的な運動を主張するグループ展も次々に起つている。一九二〇年（大正九年）には未来派協会、一九二三年（大正十二年）には、中川紀元、古賀春江などのアクション、村山知義、柳正夢などのマヴォ、この二つ

をひとつに発展させた三科会、更に分散して、造形・文芸戦線美術部、単位二科を形成し、昭和の初めには、佐伯祐三・前田寛治らが一九三〇年を指して一九三〇年協会を、また日本プロレタリア美術家聯盟など相ついで結成されていった。

一九二二年（大正元年）のフューザン会の第一回展では官展系の客観的な自然描写にあきたらずより自由な人間性の表現が叫ばれ、その中から二科会や草土社が生まれ、日本美術院洋画部からは春陽会が創設されている。当時の画壇がこれらの様式を一つの芸術運動として迎え入れたというよりは、その時々々の傾向を表面的に取り入れることに忙がしく、単なる模倣上の域を脱せず、十分に理解し、消化するゆとりもない状態であつたといえ、若い作家たちにと

つて、その刺激はあまりにも強かつたことは容易に想像されよう。

### パリ留学

一九二五年（大正十四年）秋、美校卒業の翌年も歌人と謝野鉄幹・晶子夫妻の媒酌の



「黒椅子による女」

もとで、ロシア文学者昇曙夢氏の令嬢と結婚。そして一九二六年（大正十五年）二月、夫人を伴つてフランス留学へと旅立つた。途中、ハワイで六ヶ月間程過し、現地のカナカ人を画題にした作品を残している。

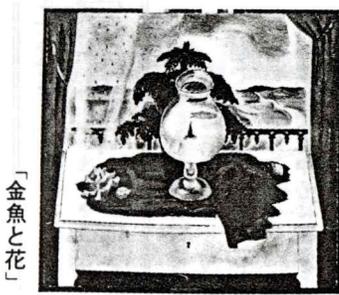
フランスでは二科会の会員でもあつたピツシエルに師事し、加えてサロン・ドートンヌのフォーブの画家たち、青騎士のグループ、パウハウス等々パリを中心とした様々な



「画家の像」

芸術運動を目のあたりにし、これまでの画風を「変させてみる。みずみずしい青年の感覚で一九二〇年代のヨーロッパ美術の空気を存分に吸い込み、それらを独自の視点でまとめ、自己の芸術をつくるこ

よう。



「金魚と花」

当時フランスに留学中だつた画家には、中村研一、伊原宇三郎、長谷川昇、鈴木千久馬などの官展系の画家もいたし、有島生馬、林俊衛、山脇信徳などもいた。鼎の最後をみとつたという岡鹿之助は美校時代の同級生であり、佐伯祐三、和田清らとも学校関係その他で知り合つていた。特に佐伯祐三とは親しかつたよ

うで、ともにバリに天折してしまつたのもくすしき縁といえよう。

鼎にとつて、この時期は最も幸福な時であつたろう。一九二七年（昭和二年）には長女が誕生し、サロンドートンヌ、巴里美術協会展にも入選し、この地での評価も上げるようになってきていた。若妻をモデルにした愛の讃歌ともみられる作品が多く残されているが、とくに一九一九年（昭和四年）第十回帝展に発表された「画家の像」は、若い新進作家のみずみずしい生命感のある作品として特に話題を呼び、ほとんどの美術誌上に取り上げられた作品であつた。しかし、この帝展開催中に描くことに夢中で食物のいたみに気がつかず食べて体をこわし、加えて治療中の歯が化膿するという悪条件が重なつて、同年九月二九日、敗血症



「静物」

により、わずか二八歳の若さで急逝してしまつた。

帰国したら、日本画壇に新風を巻き起し、真の画壇を築くのだという気概を手紙に託し、その夢を見果てぬま、に天折したのである。

翌年の四月、彼の死をいたみ、石原純、伊原宇三郎、岡田三郎助、大久保次郎、田辺至、御厨純一の諸氏が発起人となり、東京の京橋にある三共楼において遺作展を開催している。

今回の展覧会はこれから五十年目に当る。これを機により多くの皆様にご鑑賞いただければと思う。

● 会 期 ● 入場料

● 会 期 昭和五五年一月五日（土）  
二月三日（日）

午前九時～午後四時三〇分  
月曜日休館

● 入場料 無料

● 美術を語る会

● 日 時 昭和五五年一月十九日（土）  
午後二時より

● 話 題 「板倉 鼎を語る」

房総ゆかりの作家を一堂に

収蔵作家五十人展

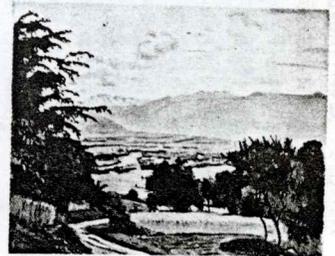
本年度の常設展は、新収蔵作品をはじめ今日まで展示する機会のない作品などを、広く公開することに焦点をあてている。

第一期では、特に房総ゆかりの美術家をテーマに、日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画の六分野にわたる作品を

展示し、九月九日で終了した。今回は第二期として、第一期でとりあげた美術家も一部含め、さらに広く房総ゆかりの美術家を中心に紹介と顕彰を図るため、五十名六二点を一堂に展覧する。

● 会 期 昭和五十四年十二月七日（金）

（金） 昭和五十五年二月十五日  
● 入場料 無料



石井柏亭「信州風景」

第31回 県展より



第三十一回千葉県美術展覧会（通称・県展）が、去る十月二十七日より十一月

十八日まで開催された。

今回の応募点数は一六八八点と前回より三六点増加したにもかかわらず、入選点数が一〇五九点と一九点減少している。これは、レベルが低下したのではなく、逆にレベルの向上を目ざした結果であつた。特に、洋画部門では、応募点数が九点増加したのに昨年より入選が二六点減と言う厳選になつて注目が注目される。これについて審査概評は、「意欲的・個性的な作品が光り類似的なものや、切り込みの足

りない表面的な描写に終わっただけのものは審査員の心を捉えず選外になつた」と説明している。

県展における年々のレベルアップは、各部門の審査員が口をそろえるところで、たとえば工芸では「作品の質が格段の進歩の跡が見え、その中には中央の展覧会に出品されても入選出来る様な作品も数点見られ」としている。反面、全部門で「会員の中では形式に墮して新鮮な感動が失われている」と、問題を投げかけている意見も出されていた。

# 「県民アトリエ」の活動に

## 望む私たちの声

「県民アトリエ」は、本年度末の完成を目ざして工事が進んでいる。それにもない館内でプロジェクトチームを作り、運営・活動の方針を検討している。

今回、各方面より「県民アトリエ」に対する意見をいただいた。ここで、それらのうち一部を紹介したい。

版画や児童の講習を

星久喜中学校教諭

坂戸 武雄

みる・語る・作る―の本格的活動が実現できる喜びでいっぱいです。アトリエでの諸講座を待ちわびた人々にとって砂漠に水をえた喜びと違っても過言ではありません。美術を学ぶ人々が増加している今日、恵まれた環境（設備・備品）の中で、よき指導者にめぐり合い高められることは、なんとすばらしいことでは

しよう。描いたり、作ったりの活動を内から支える鑑賞、美術ライブラリーの諸学習も魅力の一つです。県民の美の殿堂としての発展を祈ります。美術実技部門の第一アトリエ（平面）の中で、版画人口の多い今日①エッチング②リトグラフ、セリグラフ等についての①②のプレス、それらの製版上の諸用具、諸設備についてご一考下さい。ぜひ、講座を設けられるようお願いいたします

児童・生徒のための、講習会の運営はむずかしいと思いますが、ジュニア部門の運営も考えられないものでしょうか。

多くの人々の

「県民アトリエ」に

佐原中学校教諭

佐藤 修

求める文化、創る文化の方向として、県民の文化向上に

役立つこととして期待している。この意義ある県民アトリエは、県のすみずみに活用できる計画と内容になるようお願いしたい。

それには、指導者（講師）も、このアトリエ指導に情熱をかけてもらいたいし、一部のサークルだけの利用や活動に限っては、より広い発展にならないと思います。

地道な文化活動、芸術を息長く続けられよう、関係者の計画、実践を期待してやみません。

美術の体験の場に……

千葉大学附属小学校教諭

野口 芳宏

御意見にお答えして

美術館より

この他、全部の方が、「県民アトリエ」の完成を待ち望んでいるとの声であった。それ故、みなさんにとって意義ある活動ができるよう検討していかねばならない。そしてその使命は、重大であると痛感している。

アトリエの活動については、主として実技講座を行い、全

友の会々員

日暮 幸子

「なすことによつて学ぶ」とは、体験を何よりも重視した先哲デューイの言葉である。情報社会の現代にあつては、とかく体験を通さぬ観念論が軽薄な流行を生みやすい。体験を通し、身を以つて知ることこそ真の理解である。

今回、県民のアトリエとして美術普及棟の完工を見ることは、美術、工芸、文化が、真の意味で県民の血肉となつて脈打つためにまことに意義が大きい。年令、趣味、階層、職種を問わず全県民に開かれた親しみのある発展をして欲しいものである。

幅広く若い芽を……

部門の活動を目ざしている。

しかし、来年度は、とりあえず洋画・彫塑・工芸などを中心に行う予定である。版画部門の講座については、将来プレス機具等を購入し、ぜひ開講したい。

講座の対象については、若男女を問わず、誰もが参加できるものとした。ただ、ジュニアを対象としたものを行うには、もう少し時間をかける必要があるように思われ

関係者の御盡力によつて、堂々たる「県民アトリエ」の完成を見るのは、ささやかな美術愛好家のひとりとして、嬉しい限りである。今後は、彫刻、焼き物の分野等の教室にも幅を広げ、より多くの人々の「美」への関心を深めて行くと共に、展覧会は勿論のこと、冬季、夏季の休業期に、若い人たちの学習の場として、学校との連絡を緊密にして、スポーツに負けぬ「美術」への関心を普及させることを望みたい。そのためにも、交通の便の御一考を。

る。しかし、これもまた実現したい講座のひとつである。

また、従来の夏季大学・美術を語る会なども継続して行うが、「県民アトリエ」では、二百人収容の講堂で視聴覚機器を持ちいて行うことができ、より理解しやすいものになると期待できる。一方、情報資料室も設けられ、図書・雑誌の閲覧も自由に行えることになっていく。

# 新収蔵作品紹介

(54年6月5日)

## 購入

浜口陽三作版画

「毛糸」「くるみ」

木村賢太郎作彫刻

「うごめくトルソーVI」

星裏一 作版画

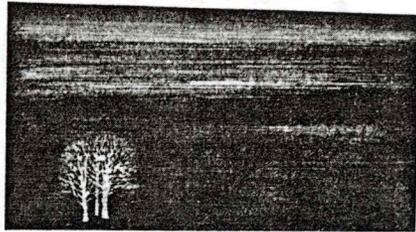
「雪の中で(K)」「雪の玉A」「星

座二番」「星座No.42」「風景(A)「

星月夜」「赤い地平線」「夜明

け」「王の樹」「陽林」「野の木

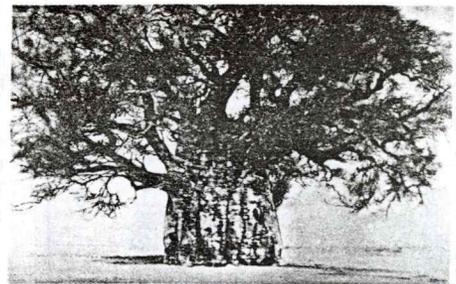
(A)」



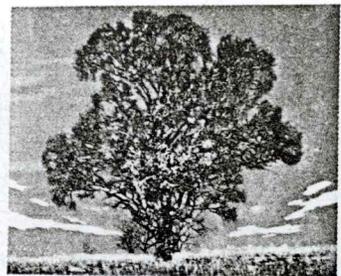
星裏一「赤い地平線」



星裏一「夜明け」



星裏一「王の樹」



星裏一「野の木」

## 美の泉

### 古墳の造形物



古代史上、古墳の存在は重要である。その中には、古墳のある一部に絵やレリーフをほどこしたものがあつた。これらを装飾古墳と呼ぶ。

小林行雄博士によると、(1)石室の壁に彩色や線刻したもの。(2)石室の箱型の屍床を刃割し、内側に浮き彫りや線刻・彩色したもの。(3)石室内の石棺に装飾をしたもの。(4)横穴(墓室)の入口や外壁または内部に、浮き彫りや線刻・彩色したもの。に分類されている。そして図文の多くは、人物・家屋・船・楯・穀・弓

筋・刀・刀子・剣・調度品三角文・円文・渦巻文・直弧文・自然の風物等である。これらをほどこした意義は、単なる装飾のため、呪術的なもの、肖像的なもの、仏教的なもの、それらが複合したものというように考えることができよう。

これらは、埴輪や石人石馬と異なり、古墳内部の秘密の場所に祈りをこめてひそやかに表現したところのいわば暗闇の芸術である。装飾古墳の造形は、昭和四十七年に発見された高松塚古墳を除いては、ほとんどが稚拙で決して高度

な芸術作品とは言えない。しかしながら、そこに表現されているものが古代人の造形意識を通して生み出されたものであるならば、表現の巧拙はあるにしても、造形芸術の一つと数えてよいであろう。

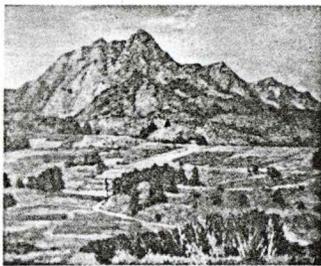
何れにしても、これら装飾古墳を通して、今日われわれは、古代人の美意識や造形に対する思想や感情を見ることができると同時に、当時の生活、そして祖先のほんとうの姿を垣間見ることができるのである。

## 寄贈

次の資料が寄贈されました。ここに厚くお礼申し上げます。

鱧利彦様より

鱧利彦作洋画「房州伊豫ヶ岳」



鱧利彦「房州伊豫ヶ岳」

# トピックス

● 関東地区博物館協会調査研究委員会開かれる

去る十月二十日、関東地区博物館協会の調査研究委員会の合同研究会が本館において開催された。

この研究会は、本年度より三ヶ年間の計画で、民俗・考古・美術の三分野において、各県より各分野二名の委員が選出され共同研究を行うものである。

この日は、各県の委員が集まり、テーマの設定や今後の方針・日程等について協議された。

## ● 緑化推進委員会より記念植樹される



美術館内に多くの樹木を植え、憩の場とするよう努力し

てきたが、このたび県緑化推進委員会より月桂樹ならびにさんご樹の二本が寄付された。去る十一月十日、雨の降る中、鈴木県出納長、県林務課の職員が参列し、植樹されたものである。

## ● 第四回美術を語る会

県展開催中の十一月十日(土)に「第四回美術を語る会」を開催した。話題提供者に前東京国立文化財研究所絵画室長の中村傳三郎氏を迎え、「初期県展にみる作家たち」について語り合いがなされた。特に我が国における本県の県展の占める位置の話があり、さらに美術の見方・考え方などの話まで進展し、参加者から有意義な会であったと称賛の声があがっていた。

## ● 友の会バス旅行終わる

十一月十七・十八の両日、総勢四十五名が参加した、秋の美術鑑賞の旅が行われた。一日目は、足利市郊外の栗田美術館を見学し、伊万里・鍋島の陶磁器の美を堪能した。二日目、霧雨の降る中を伊香保から高崎市の群馬の森を訪れ、開館間もない群馬県立歴史博物館、同近代美術館を見学した。博物館では、埴輪の偉容におどろき、美術館では

群馬県展をみながら作品の制作談義に花が咲いた。



## ● 六十万目目の入館者

開館以来五年と十一ヶ月余りの十月十一日(木)、六十万目目の入館者を迎えた。六十万目目は千葉市の田村光行君(六才)で、記念品を贈った。

## ● 市原館長に県功労賞

本館の市原正夫館長が、県教育功労者として、十一月一日、県教育委員会より授賞された。このたびの授賞は、教育行政の企画・立案、ならびに芸術・文化の振興に寄与したことによるものである。

## 伝言板

● 次の期間が休館となりますので、ご注意ください。

- 12月24日(月) 定期休館日
- 12月25日(火) 臨時休館
- 12月26日(水)・1月4日(金) 年末・年始休館日

## 談話コーナー

### 美術館を見学して

千葉大学附属小学校六年 草間奈月

九月二十二日に五、六年生で千葉県立美術館にいった。そして、房総に訪れた巨匠たち」というのと、'79展」というのを見て来た。

いろいろな人の絵があり、大きさも様々だった。人物の絵では、大久保次郎という人の「平和」と中村つねという人の「ぼうしをかぶる自画像」がとてもいいと思った。大久保次郎の人物画は、「平和」にかぎらずみんなそうだが、あたたかくて、ほのぼのとした感じがした。また「ぼうしをかぶる自画像」は、よくわからないが、ゴッホの絵のようなかんじをうけた。

風景の方では、「きりの湖はん」山本かなえ、「潮来」小杉未醒、「下すわのリンク」金山平三の三点が、特に心に残った。「きりの湖はん」では、ぼやけている木の感じが「潮来」では、

にこっている水とふか緑の木の感じ、「下すわのリンク」は雲に光のあたっている感じが素敵だと思った。絵を見おわってから感じたことだが、人物や畑、花木、湖などの絵は多いが、大やねこなど、動物の絵が少ないと思った。そんな中で、坂本繁二郎の「牛」は、牛の胴の色にいいぬいさを感じられ、また、バックの色とともによくにている感じもした。

こうして見ていくと、あたりまえのことかもしれないが、一人の人のかいた絵は、どれもみな、よくにている。今まで、絵をみてもだれがかいたのか、などはぜんぜんわからなかったし、興味もなかった。しかし、これからは、もっとよく絵を見て、だれの絵と似ているかとか、どういう人だったのかということも、いろいろ調べてみようと思う。

そうすれば、図工の絵の勉強のときも、一層おもしろくなると思う。

本当に、すてきな絵をみられて、とてもよかったです。

# 各種講座あんなない

## ■てん刻入門講座

美術館主催による後期のてん刻入門講座を開催いたします。

てん刻とは、木や石などの印材にてん書体で文字を刻すること、本来はそれを印肉で紙に押し込んだものを鑑賞します。しかし、この技法そのものは実用的なものとして、蔵書印・落款印などにも応用することができ活用する場は多い。

本講座は、てん刻の技法や材料を知り、彫る喜び、使う楽しみを味わう初心者向けのものです。なお前回まで受講された方はご遠慮下さい。

●日時  
昭和55年2月23日(土)～24日(日)、二日で一講座、午前10時～午後4時

●講師  
古川 悟氏(日展審査員)  
白鳥弘苑氏(謹慎書道会 評議員)

## ●会費

無料(ただし、材料費については自己負担)

## ●募集人員

四十名(応募者多数のときは抽選で決定)

## ●会場

美術館研究工作室

## ●申し込み

講座名、住所、氏名、電話番号を記し、往復はがきで美術館内普及広報班「てん刻入門講座」係宛  
●締め切り  
昭和55年2月1日(金)

## ■七宝焼講習会

制作技法の習得を通して、手づくりの楽しさ、使う喜びを味わうことのできる七宝焼基礎講座である。

●期日  
昭和55年3月6日(木)～7日(金)

## ●講師

未定(交渉中)

## ●募集人員

四十名(応募者多数のときは抽選で決定)

※会場、会費、申し込み等については「てん刻入門講座」と同じ。

## 団 体 展

(12月～2月)

▽第24回子ども県展

12・11～12・23 無料

▽第15回登龍社・宮坂会書初展  
1・5～1・6 無料

▽第10回千葉県大学美術連盟展  
1・5～1・13 無料

▽日輝展選抜展  
1・15～1・20 無料

▽第32回千葉県小・中・高校書初展  
2・5～2・11 無料

▽昭和54年度千葉大学教育学部美術科卒業制作展  
2・5～2・11

▽昭和54年度千葉大学教育学部書道科学生書道展  
2・5～2・11 無料

## 美術館友の会々員の

## 葉 美 会 展

会期 55・1・15～27

搬入 55・1・14、正午迄  
※作品は20号内外、一人2点以内。

1月27日、午後2時より作品指導研修会を計画しています。詳細は友の会事務局へ。

## 来 館 者

9月

15 青野銚子市教育長

14 今井県教育長

19 県内婦人教育委員七名

22 在日本大韓民国居留民団五事務局長他一名

美術館研究協力校千葉大附属小学校五、六年生

28 沼田県副知事

27 槽谷県教育次長

長谷川千葉市教育長

茂原保健所一行三十名

2 習志野市文化会館長

他一名

10月

2 千葉市役所近岡助役

5 茨城県企画室一行五名

6 信濃デッサン館長窪島誠一郎氏

5 佐倉市教育委員会一行五十六名

21 文部省大臣官房審議官

鈴木勲氏

11月

24 県博協役員一同

6 今井県教育長

2 茨城県総合開発審議会委員一行九名

13 佐倉市収入役

26 八千代市役所広報課

9月

1 巡回展(銚子会場)開

11月

16 関博協研究会(群馬)

17 美術館・友の会共催第九回県外の美術と文化財を訪ねるバス旅行

19 県展実行委員会反省会

9月

11 韓国との交流子ども作品の審査

18 関博協研究会打ち合わせ(群馬)

19 20 全国博物館大会(仙台)

28 美術館・博物館、館長課長合同会議

29 第三回美術を語る会、話題提供者、本館副館長高橋在久

10月

2 3 県博協県外視察(新潟方面)

6 講演会「房総を訪れた作家」講師・窪島誠一郎氏

15 美術館資料審査委員会

23 美術館協議会

24 県博協第五回役員会

27 昭和五十四年度関博協

31 調査研究委員会

8 県博協第二回研究会(久留里城址資料館)

9 全国美術館会議(広島)

10 第四回美術を語る会

9 話題提供者、中村博三

16 郎氏(美術評論家)

16 県緑化推進委員会による植樹